

Title	歌合歌に及ぼした屏風歌の影響 : その受容と脱却
Author(s)	田島, 智子
Citation	詞林. 1987, 1, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 歌合歌に及ぼした屛風歌の影響

## その受容と脱却

田

島

子

風等は、復古主義の現れであって、大流行の頃の屛風歌とは性格を だが、それ以後下火になり、屛風に設けられる色紙形は形骸化して ば頃から作られ始め、十一世紀初頭の一条朝まで大いに流行した。 消えてしまった存在である。しかし、和歌の流れに及ぼしたその影 異にする。このように屛風歌は、二世紀にも満たない期間流行し、 作されたもの、例えば建仁三年(一二〇三)の藤原俊成卿九十賀屏 しまう。屛風歌が全く詠まれなくなるわけではないのだが、後に制

響が、多大なものであったということが推定される。 屛風歌は、屛風の大和絵に合わせて詠まれた歌であり、九世紀半

> 二ヶ月を構成したようである。 り、屛風絵を描く際にはその中から適当に選んで組合せ、全体の十 きる。この中、月次屛風は、画題となる景物の種類がほぼ決ってお 大和絵屛風は大別すると、名所屛風と月次屛風に分けることがで

まりに少ないもの(春は二回以下、夏秋冬は一回以下)は、紙面の の画題が使われた回数を示したものである。ただし、使用回数があ 風歌資料から、画題を推定し、季節の推移に従って並べ、下欄にそ (表1)は、九世紀半ばから十一世紀半ばまでの現存する月次屛

都合上特別な場合を除いて割愛した。

に取り上げられたものを指摘し、更に享受の仕方を考察したいと思 ことは、想像に難くない。本稿ではそのような素材のうち、歌合題 れることによって、和歌の世界に取り入れられた素材があるだろう の景物や年中行事が多く含まれている。その中には、屛風歌に詠ま これらの画題の中には、それまで詠歌の対象とされなかった季節

屛風歌の画題と歌合歌の題、屛風歌の詠法と歌合歌の詠法について

比較考察を試みたいと思う。

るとの指摘がある(注1)。そのようなことも考慮に入れながら、 そもそも屛風歌も題詠の一種と見ることができ、性格が類似してい

本稿では、その中でも特に歌合歌との関係について考察したい。

楼	柳	海景	梅	初午稲荷酯	<b>(6</b> )	淹	子日	若菜	卯杖	大饗・臨時客	元日	春
45	22	4	47	9	7	8	31	. 20	2	3	14	
田植(早苗)	照	郭公公	五月五日駒	五月五日菖蒲	淹	橘	卵花	神祭	資茂祭	祭使		Ų
1	2	32	<b>競</b> 5	稿 19	10 -	4	12	8	6	4	26	
	-	32	網	紅	10	勒		秋	海	t	秋	
鹿	驀	曆	代	葉	月	迎	秋野花	## H	景	タ	風	秋
10	4	12	3	32	33	11	22	10	10	36	6	
大慶	神祭	賀茂臨時祭	神楽	擔衣	相代	霜	時雨	志賀山越	稲刈	紅葉	残菊	冬
10	4	8	13	5	-15	3	10	2	3	9	14	

)

そ来れ

春立てばまずひき連れてもろ人も万づ代経べき宿にこ

后寛子春秋歌合において、

番

左腓 臨時客

小式部命婦

合では唯一度、一六三 天喜四年(一〇五六)四月卅日皇 る。屛風絵では、「大饗」と合わせて3回現れている。歌 白および大臣の家で、親王・公卿以下を饗応する行事であ

と詠まれているのを見出す(注2)。

表 1

大饗の際の屛風に、 **①むらさきもあけもみどりもうれしきははるのはじめに** 屛風歌では、寛仁二年(一〇一八)に行なわれた賴通家 かたかきたるところをよめる 入道前太政大臣大饗しはべりける屛風に臨時客の **藤原輔尹朝臣** 

②むらさきも袖をつらねてきたる哉春たつ事はこれそう れしき(赤染衛門集Ⅰ五九八) たかつかさ殿のうへの御賀、関白殿のせさせたま へとて御ひやうふの歌めしゝに 臨時客

(

屛風に、

と詠まれ、長元六年(一〇三三)道長室倫子七十賀の際の

きたるなりけり(後拾遺集一六)

う。

たとえば「臨時客」。臨時客とは、正月二日に摂政・関

2

晦見落花	벢	春	帰	桃	田返()	春鷹	鴬
落花	吹	駒	雅		(苗代)	狩	
26	9	3	8	3	12	4	4
六	344	4.4.			五		
月	義	納	泉	夏	月	海	撫
軷	ווע	凉		山	雨	景	子
29	2	7	3	5	2	5	9
				秋田刈	小魔狩	志賀山越	菊
				3	22	2	24
			年越	仏名	梅	<b>**</b>	氷池
			9	8	6	36	4

二年の頼通家大饗屛風に、野風に描かれたのは後者である。やはり寛仁屛風歌資料によれば、屛風に描かれたのは後者である。やはり寛仁関白及び大臣の私邸で行う摂関大臣大饗の二種があるが、現存するる。大饗には、中宮・東宮の二宮の御殿で行う二宮大饗と、摂政・ノ

大饗したる所に、とのゝ御前

④君がりとやりつる使来にけらし野辺の雉子はとりやしつらん

摂政家屛風歌、大臣大饗会所楽舞有所拝礼 祭主輔親

と詠まれ、また同屛風歌に、

③新しき春のはじめに来る人は三年の友と思ふなるべし

C ある。

春、臨時客をよめる 小弁和歌には珍しく、管見に入るかきりでは、 では、屛風歌以外ではどうかと見てみると、この題材は

づらしきかな(後拾遺集一五)むれてくるおほみや人ははるをへてかはらずながらめ

の一首を別にしても、臨時客という題材が、主として屛風して実景を詠んだ歌であるかどうかは判断できないが、こを見るだけである。この歌の詠作事情は不明なので、はた

客が臨時に集まる客を饗するのに対し、大饗は親王・公卿また、「大饗」は臨時客と同じような行事であり、臨時歌の世界で取り扱われたものであることがわかる。

を予め招待して行う。これもよく屛風に描かれた画題であ

とある。また、いつの折のものか不明であり、屛風歌ではないかも(夫木抄一六八三二)のよろづよの舞の袖ふるやどにこそあるじたづねてもろ人もくれー

大臣家、大饗するところ

しれないが、「これはゑに」として、

(兼盛集1一二〇)

⑥ひきつれて大宮人のきませれば春うれしくもおもほゆるかな

とある。

歌の第一句「春立てば」は、①「はるのはじめ」②「春たつ事」③の、屏風歌から想定される光景と同じである。表現の上でも、歌合り、屛風歌ら想定される光景と同じである。この事実からも、初めに引いた天喜四年の歌合の「臨時客」題は、屛風歌を通じて摂取されたと考えてよいだろう。また、その歌合歌で詠まれた光景を想定してみるに、大饗や臨時客の準備の整った宿に訪れて来る客人達であたと考えてよいだろう。また、その歌合歌で詠まれた光景を想定したみに、大饗」を題材にした歌は見出せない。臨時客屛風歌以外では、「大饗」を題材にした歌は見出せない。臨時客

歌合に取り込まれていったのである。<br/>
歌合に取り込まれていったのである。

の仕方を、屛風歌に学んでいることがわかるのである。

もろ人もくれ」に、よく似ている。歌合歌が、詠むべき場面や表現も万づ代経べき宿にこそ来れ」は、⑤「やどにこそあるじたづねて

「まずひきつれて」は、⑥「ひきつれて」に、第三句以下「もろ人「春のはじめ」と、屛風歌によく詠み込まれる要素である。第二句

合で初めて登場した題に、「網代」がある。がある。だとえば、次の八八善安和二年(九六九)六月十日内裏歌がある。たとえば、次の八八善安和二年(九六九)六月十日内裏歌

網代

左

網代木にかけつつ洗ふ唐錦氷魚粽てよする紅葉なりけり

水上に滝の白糸見えつるは網代に氷魚のよればなりけりまた、一四九、泉承[四一七年] (一〇四九~一〇五二)九月十九日関白左大臣頼通家蔵人所歌合、一〇五 承暦二年(一〇七八)十月関白左大臣頼通家蔵人所歌合、一〇五 承暦二年(一〇七八)十月関の古大臣頼通家蔵人所歌合、一〇五 承暦二年(一〇七八)十月関の古大臣頼通家蔵人所歌合、一〇五 承暦二年(一〇七八) 晩冬権大納言師房歌る。しかし、網代という景物を詠んだ歌は古くからある。まず万葉ない、秋上に滝の白糸見えつるは網代に氷魚のよればなりけり

柿本朝臣人磨従近江国上来時至字治河辺作歌一首

(巻三、二六六) 阿白木尔 不知代経浪乃 去辺白不母物乃邵能 八十氏河乃 阿白木尔 不知代経浪乃 去辺白不母

他三首ある。また後撰集に、

宇治のあじろにしれる人の侍ければまかりて

うぢ河の浪にみなれし君ませば我もあじろによりぬべきかな大工奥倹

同様に、季節の景物についても、屛風歌の介在を指摘できるもの

- 4 -

網代という素材自体は、そう珍しいものではなかった。 の歌があり、古今和歌六帖第二帖にも、「あじろ」の分類がある。

とに気付くのである。従来は、網代木によせる波(万葉集二六六) だが、詠みぶりをみてみると、歌合歌がそれまでと違っているこ

や、宇治人が漁をしている光景(万葉集一一三九)の描写であった り、木くずや波が網代に寄せることに言いかけた人事詠(後撰集)

五七)藤原師輔五十賀の際に、詠進されたかと思われる屛風歌に、 である。見立ては、屛風歌に特徴的な技法であり、天暦十一年(九 る。このような詠み方が頻繁にみられるのは言うまでもなく屛風歌 宣歌)、網代に寄る氷魚を滝の白糸に見立てたり(惟成歌)してい 錦と見立て、「氷魚粽で」と「日を経て」の掛詞をもちいたり(能 一三六)であったりした。一方、歌合歌は、網代木にかかる紅葉を

そ見る(元輔集Ⅲ七四 かはなみのたつことかたきにしきとはあしろにおつるもみちを

とか、安和元年(九六八)以前右兵衛督忠君の調じた屛風の歌に、 十一月、あしろ

りける(順集Ⅰ八八)

あさこほりとくるあしろのひをなればよれとあはにそみえわた

八三)一条大納言為光家障子の歌に、 は、屛風歌では網代を詠む際の常套的な手法であり、永観元年(九 などとあり、枚挙にいとまがない。また、「氷魚」を掛詞にするの

りけり(兼澄集Ⅰ六九 あしろきにひをへてよするもみち葉ゝたちともしらぬにしきな

とあるなど、数多く例がある。

ところで、歌合の能宣歌は拾遺集に、 寛和二年清凉殿のみさうじに、あじろかける所

二 六)

網代木にかけつつ洗ふ唐錦日をへてよする紅葉なりけり(冬、

よみ人しらず

殿の項目に、 弘廂(以下割注)板九枚。北有荒海障子。南方手長足長。北

として、入集している。「清涼殿のみさうじ」とは、禁秘抄の清涼

面。字治網代布障子墨絵也。

風歌としてそのまま使えるほど、歌合歌が屛風歌の詠み方を受け継 海障子の北面の網代絵に押す歌として、採用されたものだろう。屛 と記述のある、荒海障子である。おそらく軟合に出詠した歌が、 荒

いでいることがわかる。

十月十九日庚申禖子内親王歌合では もう少し、歌合歌を見てみると、二〇五

承曆二年 (二〇七八)

氷魚のよる網代にかかる白波は水にふりつむ雪かとぞみる

ひまもなく網代に氷魚のよる時はしきりに波のたつかとぞみる

題であり、詠み方のお手本となったのは、屛風歌なのである。 おいて題として設けられた時、人々の念頭にあったのは、屛風の画 いう素材は、万葉時代から和歌に詠まれてはいた。しかし、歌合に のごとく、盛んに見立てを用いており、屛風歌的と言える。網代と

	泉	後朱雀後一条三条一条	天 皇
— — — — 六 四 四 四 — 九 八 六			(
[ 天喜四年] 斎院謀子 [ 〃四—七年] 頼通家 『 八四—七年] 頼通家	某年冬権大納言師房 「永承三―四年」離子 永承四年内裏 『五年』 『五年』 『本華』	寬和二年內裏歌合 第弘年間花山法皇 寬弘年間花山法皇 寬弘年間花山法皇 長元八年関白賴通 長元八年関白賴通 長八元年良子內親王貝合 《二年女御生子 《二年女御生子	『平安朝歌合大成』による/歌合番号・歌合名
● ● 放 ○	• ○ 馬		<b>臨稲子苗春 照早夏鵜六駒網時荷 葵</b> 月
0	0 • • •	● ○ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	胸網 精神仏 水楽名

屛風歌の介在が考えられるのである。 が「夏山」に、篝火の燃える鵜川の場面が「鵜川」 える場面が「早苗」に、夏の木陰に凉む旅人の場面 照射をして猟をする場面が「照射」に、田に苗を植 気付く。師房は禖子内親王の家司であるので、つま ている。この時期は、屛風歌の画題を摂取していく 登場し始める。そして、屛風歌の流行も終わった十 である。これらの題は、拾遺集撰集前後から歌合に の題と季節の景物題について、それが設定された歌 に類型的に見られる詠み方に従っている時、そこに 詠まれてはいても歌合では別の詠み方、即ち屛風歌 れなかった素材が題として設定されたり、または、 い浮かべて詠んだとは限らない。しかし、従来詠ま 表2参照。)歌合の歌人達が必ずしも屛風の絵を思 れる。(そのような題が設定された歌合については つ場面が「鑄衣」に、それぞれ影響していると思わ に、小鷹狩・大鷹狩の場面が「狩」に、冬の夜衣打 源師房と禖子内親王の歌合に、圧倒的に多いことに と言えよう。また、歌合の主催者別に見ていくと、 ことによって、歌合の題が豊富になっていった時期 一世紀後半の、後冷泉帝の頃、最も頻繁に用いられ 合を、後拾遺時代までに区切って一覧表にしたもの (表2)は、今まで指摘した年中行事・生活行事

子」題に、春沢辺に群れる馬の場面が「放駒」に、

この他にも、屛風絵の春鷹狩の場面が歌合の「雉

河 白 河 後 冬 後 冷 = = = 二〇六 === 二〇九 \_\_ O T 一六二 九一 一八九九 一八八八 一八七 一八五 一八二 一九〇 七四 一七八 七 一六八 一六六 六四 一六三 某年 応徳三年通宗女子 永保三年 某年西国受領 承曆四年篤子内親王 承曆二年謀子内親王 某年夏謀子内親王 某年斎院碟子内親王 康平六年丹後守公基 [治曆二年] 滝口本所 [永承元—康平三]頼資 [寬治三年] 顕家 三年定綱 四年謀子内親王 五年」 **六年**] 少将公基 備中守定綱 嬉子内親王 頭中将顯房 皇后宮寛子 〕斎院鞢子 O 0 00 0 O ڻ 0 0 00 0 0 O 000 0 00 0 0 表

●: 師房・菓子内親王関係の歌合

の年中行事や生活条件を、好んで歌題に取りいれていることは、萩谷朴氏が既に指摘しておられる(注いることは、萩谷朴氏が既に指摘しておられる(注いることは、萩谷朴氏が既に指摘しておられる(注い場所の画題であった行事や最物が、和歌の制作を通じ、りは、約二世紀の間にわたる屏風歌の制作を通じ、りは、約二世紀の間にわたる屏風歌の制作を通じ、りは、約二世紀の間にわたる屏風歌の制作を通じ、ひみ深いものになり、機の熟した十一世紀半ば頃かじみ深いものになり、機の熟した十一世紀半ば頃から、盛んに歌合題に取入れられたと考えられよう。ら、盛んに歌合題に取入れられたと考えられよう。

りは師房の好みということになろう。師房が、恒例

ところで、この時代、屛風歌がどのように鑑賞されていたかについて考えてみたい。まず、時代は下がある。 カゲハタチウカリケリ

人きのかげにやすみたる所」、作者「読人不知」と歌は拾遺抄八十二番、詞書「月令の御屛風、たび

ムハ、ヤガテヱニカケル人ノ心ニナリテ読ヲヨメルナリ。屛風、障子等ノ絵ヲ歡ニヨ是ハ旅人ノ夏山ノコカゲニヤスミタルカタ

ム也。〈以下略〉

屛風歌障子歌は画中の人物の気持ちになって読むものだ、と述べて 親王著裳の際の屛風歌であることがわかる。顕昭はその注において、 して入集しているが、躬恒集によって、延喜十八年の女四宮動子内

いる。

次の判がなされた。 えていたかどうかはわからないが、屛風歌を現実の光景に接して詠 んだものと考えていた節が見受けられる。一四八 一〇五一)夏六条斎院菓子内親王歌合に、「鵜川」題が設けられ、 十一世紀まで遡ると、画中の人物の心に成り変わって詠んだと考 [永承六年] (

夜もすがら鵜舟にともすかがり火の影ほのかにも漕ぎ帰るかな 〈中略〉

か

2がり火の隙しなければ夜しもぞ鵜川の底はかくれざりける は。ただ水を申す。〈中略〉 さぶらふぞ。また貫之がよみたるは、まことの水の底にや 底のあらはに見えむはいと難くや。ただ常にある言のよく うつれる影、水の燃ゆるやうに見ゆるこそ道理にはあれ。

貫之が「星かと見ゆる」も、いと近くて見たるとは聞こえ 「影ほのかに」は、遠く見やらむほどはなどか見ざらむ。

侍らず。 (以下略)

ø, ころの「貫之がよみたる」歌とは、延喜六年(九〇六)の月次屛風 判詞の前半が、二首目の歌についての判なのだが、それに言うと

篝火のかけしるけれはうは玉のよかはのそこは水もゝえけり (貫之集Ⅰ一〇) 六月うかひ

> を指し、一首目の判詞である後半に言うところの「星かと見ゆる」 の歌は、延喜二年(九〇二)中宮温子の屛風の、

大空にあらぬ物から川かみにほしとそ見ゆるかかり火の影(賈

之集Ⅰ一五一)

だ歌であるかのようにとらえている。 ら見ているとは思えない」と言って、貫之の屛風歌が、実景を読ん いるのだ。」とか、「貴之が「星かと見ゆる」も、それほど近くか を指している。どちらも屛風歌であるのに、「貰之が詠んだ『夜川 の底は水ももえけり」は、本当の水の底だろうか、ただ水を言って

Щ

は必ずしも屛風歌的なものを無批判に受け継いではいない。 てはいても、やはり、屛風歌と歌合歌の性格の違いがあり、歌合歌 しかし、屛風歌が現実の光景を詠んだものであるとして享受され

苗代

二月十二日弘徽殿女御生子歌合に(判者藤原義忠)、

たとえば、「苗代」題において、一二八 長久二年(一〇四一)

左かっ

山里の外面の小田の苗代に岩間の水を堰かぬ日ぞなき

植ゑぬより守るめるものを小山田は苗代水にまかせたらなむ

侍従乳母

藤原隆資

〈前略〉植ゑぬより守るといふことば、しか書き流しけむ

水茎をかしう侍べるを、苗代水にまかする事や、

### て古言に侍らむ。〈以下略〉

頼忠家の屛風に、 屛風歌によくある表現である。例えば、永観二年(九八四)廉義公 とある。判に傍線部の如く批判しているが、「苗代水にまかす」は、

二月、ゐなかいへにたつくりたるところ

ちよふともつきせぬいねのたねなれはなわしろみつにまかせて をみむ(元輔集Ⅱ一二六)

富田里堰河水入苗代

とあり、延久元年(一〇六九)の後三条帝大嘗会主基方屛風歌にも

種まける苗代水を堰あけて富田のさとにまかせてそ見る

とある。

東谷歌合に(判者不明)(注6)、 また、「神楽:題において、二四〇 承徳元年(一〇九七)東塔

左持

柳葉に雪ふるときの御神楽は面白さ増すものにぞありける

たちのほる庭燎のけぶり風ふけばなびかざらめや神の心も 字に、雪ふればとだにあらざらましかば。又、面白しとい (前略) 左歌、本ぞすこしおもふべく侍りける。腰の五文

とある。(前略)としてしまったところは、右歌の下旬についての ちかき障子歌とこそおぼえ侍れ。それは、この歌よりはい 神楽の起こり知りてよむなれば、咎にも侍らじ。右歌も、 はれてや侍りけむ。〈以下略〉 ふ言、古めかしく侍り。近き歌にもまた侍り。されども、

か。

か。 述べてあるので、傍線部の批評は、右歌の上句のことを言っている と思われる。では、上句のどこが近頃の障子歌と思われるのだろう 批評が述べてあった。その次に左歌の「本」、つまり上句について

和二年(九六九)頃の、 十一世紀末の「ちかき」頃には屛風歌は残っていないのだが、安

かくらし侍る

山人のたける庭火のおきあかしこゑこゑあそふ神のきねかも (能宜集Ⅱ三六)

とか、正暦元年(九九〇)以前の制作の

すらん(元輔集Ⅲ一五九) にはひたくほかけにきゆるさかきはのしもはいくよかおかむと 十月かくらしたるところ、にはひたけり

おり、歌合の右歌の上句、「たちのぼる庭燎のけぶり」と同じであ

のような屛風歌がある。いずれも、庭火を焚いていることを詠んで

そのような表現を踏襲している歌合歌に対する批判ではないだろう めらわない。「苗代」題の「苗代水にまかする」や、「神楽」題の げたことからもわかるように、同じ表現を繰り返し用いることをた る。判詞が指しているのは、このような歌ではないかと思われる。 に流れて古言に侍らむ」も、「近き障子歌とこそおほえ侍れ」も、 「たちのぼる庭蟟のけぶり」も、類型性の強さを示している。「世 屛風歌は、とても類型性が強い。「網代」題において少々例を挙

代」題で先にも例にひいた、一二八 では、歌合歌が志向していたのは、どのような歌だろうか。「苗 長久二年(一〇四一)弘徽殿

結

### 左

たち離れ沢辺に荒るる春駒はおのか影をや友と見るらむ

真菰草青みわたれば沢に荒れてとり繋がれぬ野辺の春駒 真菰草青みわたれるなどは、ひきどころある春駒と見え侍

をや友と見たらむと侍る歌のすゑは、方ぞ注連のうちに勝 るを、すゑぞおくは知らぬやうに見え侍らぬに、おのが影

て、躍動感のある、より現実味のある歌を評価している。 とある。「ひきどころある」とか「勝鞭うちたちぬべう」とか言っ

鞭うちたちぬべう乗り人ゆかしうなむ。

また、「鵜川」題では、先にも例に挙げたことからわかるように

親王侍所歌合では、 から抜け出し、二〇九 夜川に映ずる篝火を詠むことがほとんどだったのだが、次第にそれ 承曆四年(一〇八〇)十月二日庚申篤子內

仲実

玉川の瀬瀬交ひのぼる篝火に捌く手縄の数を知りぬる

るかな(夫木抄三一七六) よしの川うぶねやつれてのぼるらんさをさすおとのしげくもな 承曆四年堀河院中宮歌合、鵜川 源経兼朝臣

うな詠み方を学ぶことから始め、次第に独自の方向に進んで行った と言っても絵画的・観念的な性格を持っている。歌合歌は、そのよ のように、より実際の光景に即した歌になっている。屛風歌は、何

成

また詠法や表現についても、屛風歌の影響が見受けられた。 通じ、題に設定されるようになったものを、いくつか指摘できた。 半ば頃からの歌合に、屛風の画題となって屛風歌に読まれることを を考察してみた。その結果、屛風歌の流行が下火になった十一世紀 屛風歌が和歌史に及ぼした影響の一つとして、まず歌合との関係

型的な表現から脱却して、より新しい表現、現実感のある表現を志 向していったのである。 しかし、歌合歌はいつまでも屛風歌的なまま留まっていない。

(注

- 1 北大学教養部紀要 和四十年三月)及び「平安期屛風歌の消長」(片野達朗氏 「平安初期屛風歌の性格」(片野達郎氏 昭和四十九年三月)に考察されている。 文学・語学
- (2) 以後、歌合名及び歌合の本文は、「平安朝歌合大成」(萩 大系(岩波書店)による。 歌集は『私歌集大成』による。「栄花物語」は、日本古典文学 谷朴氏編著)による。勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』、私
- (3) 『平安朝歌合大成』所収の歌合、二二九、一三三、一三五 一三七、一三八の「史的評価」の項による。
- 書陵部蔵「大嘗会悠紀主基詠歌」による。
- 萩谷朴氏は、源俊頼または藤原通俊かと推定されている。

5 4

(大学院博士後期課程)